

# 耶 麻

令和4年度 第2号  
[通巻 132号]  
耶麻地区小学校長会  
令和4年10月17日



## 巻頭言

### 「啐啄同時」

耶麻地区小学校長会副会長 喜多方市立第一小学校長 杉原 智

ここ数年、教職員の大量退職により、各小学校とも初任者が毎年配属になったり、経験年数の浅い先生が多くなったりしていることと思います。本校も、教職経験年数10年未満の先生が8名もおり、担任の約半数を占めている状況です。そして、中堅と言われる30代前後半から40代前半の教職員は数えるほどしかいない。何ともバランスの悪い状況が続いています。若い先生方が多くなることは、校内がとても活気づく反面、経験不足からくる安易なミスや指導力不足など課題も多く出てきます。しかし、30数年前、自分が採用になった頃も大量採用の時代で、毎年、新採用教員が赴任するのが当たり前。1校に2名の初任者が配置されることも珍しくありませんでした。

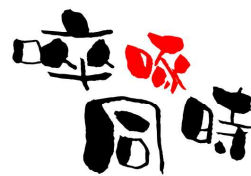
初任者の頃の自分ことを振り返ってみると、理想だけは高く、指導力など皆無でした。研究授業を行う順番を決める際には、校長先生に、「一番下手な人からやるんだ。上手な人が先に授業をやったら、その後やれなくなっちゃうだろう。初任の先生からやるんだ。」と言われたことを思い出します。そして、校長先生の予想どおり、指導案の事前検討会では、各先生から質問のオンパレード。ついには、教務主任の先生から「もう一度、考え直した方がいいですね。」と言われ、途中で指導案を閉じられてしまう始末でした。見かねた校長先生から、「今日から、俺の所に通え。」と一言。校長住宅で指導案の書き方から、授業の組み立てまで丁寧に指導して

いただきました。おかげで何とか研究授業を終えることができました。言葉は、いつもぶっきらぼうで、厳つい校長先生でしたが、心の温かい方で、教員として雛にすらなれず、あえいでいた私を支えててくださったのだと感謝の思いしかありません。

私の好きな言葉に「啐啄同時」という言葉があります。「啐(そつ)」とは、卵の中の雛が「もうすぐ生まれるよ」と内側から殻をつつく音。「啄(たく)」とは、そんな卵の変化に気づいた親鳥が、「ここから出てきなさい」と外側から殻をつつく音。

殻を破る雛と、それを導く母鶏。そんな両者の「啐」と「啄」が、少しもずれることなくピタリと同時に行われることを表す言葉で、教育における師弟の理想であり、学ぼうとする者と教え導く者の息が合って、相通じることを示す言葉です。初任の際にお世話になった校長先生は、正に、私にとっての母鶏だったと感じます。

今、毎年のように赴任してくる初任の先生方の「啐」に対して、果たしてお世話になった校長先生がしてくださったように「啄」できているのか不安になります。これからの教育界を背負っていく若い先生方を少しでも、支えていていければいいなあと思います。



## ～退職校長より～

## 原点回帰（初心に帰って今思うこと）

前喜多方市立関柴小学校長 渡部 憲生

春、鶯の清らかに鳴く声が響き、他にも、カッコウの甲高い鳴き声や野鳥のさえずりが山々にこだまする、そんな自然豊かな場所がこの4月からの私の新しい職場です。たくさん緑の中に白い鉄筋の校舎が立ち並び、二十歳前後の青年たちが軽やかな足取りでキャンパスを移動していく福島大学での勤務が始まりました。私にとってこの新たな勤務地には二つの思いがあります。一つ目は、これまで母校での勤務という果たせなかった夢が、退職後にこんな形で実現したことです。二つ目は、その学校が、私が教員を志し、その後38年間教職に携わるスタートの地点だということです。この価値ある地で、教員を目指す学生と共に、原点回帰、初心に帰って子どもたちの健やかな成長のためにもう一度学び直してみようという思いを胸に、勤務が始まりました。

この4月に勤務し始めてからの印象は、学生たちの授業に取り組む態度が、すこぶる真面目だということです。みんな教員になって子どもたちの教育に携わるんだという明確な目標を持っているからだと思います。自分の学生時代のことを振り返ると、漠然と授業に参加していた自分の姿が何とも恥ずかしいばかりです。こんな学生たちを前にして、しっかりと大切なことを伝え、考えさせていかなければならないと強く心に思いました。困ったことは、こんな学生さんたちですから、授業評価もなかなか厳しく、学期末のアンケートによる授業評価にも意識の高さが表れていて、身の引き締まる思いでした。今の時代、学校現場での先生方も、色々な評価に晒されて苦労しているところですが、こちらの職場でも日々精進が大切だといったところです。

授業では、これまでの教員生活で感じて来たことを基に、初心にかえって今大切にしたいことを学生に伝えています。その一つに、「子ども理解」に基づき、子ども一人一人をしっかりと

捉えて接していく、指導にあたるということがあります。現場で見ているとどの子ども大なり小なり心に様々な問題を抱えています。それが何らかのきっかけで顕在化し突然問題行動となって表れて来る事案がたくさん見られました。不登校の子ども、いじめの加害児もしかりです。それらの原因として、文科省では、成長過程での発達課題クリアのためのおとなの関わり方（支援のあり方）の問題をあげています。それはまさに今大切にされている「非認知能力の重要性」「非認知能力育成のあり方」が大きく関わっています。今、学生たちには、教科指導を通して、さらには教科指導の前段階として、子どもの発達を意識し、非認知能力の育成を考慮して子どもに接し、指導に当たっていくことの重要性を伝え、共に考え、学んでいるところです。

今担当している授業では、小中学校等の教員、その他、公務員、企業への就職など、その進路は様々ですが、大半の学生は、子どもたちと充実した教育活動を行うことを夢見ながら毎日熱心に授業に取り組んでいます。学生たちが現場で存分に力を発揮し、先生方と共に子どもたちの健全な成長に寄与できるよう頑張っている現場に送り出したいと思います。しかし、今、教育界は大変厳しく、多くの問題を抱えている状況を学生たちも大変不安に思っています。校長先生方も日々学校経営にご苦労されていることと思いますが、どうか若い先生方が希望をもって教育の世界に進み、未来を担う子どもたちを育てていくことができるようご尽力をお願いいたします。

長い教員生活を通して、校長先生方、先生方に支えられて勤務することができました。

本当にお世話になりました。ありがとうございました。



## 転出校長より

### 耶麻地区の思い出・近況報告

佐川 正人

耶麻地区校長会には、喜多方第一小学校に3年、堂島小学校に2年と5年間お世話になりました。この間、学力向上、生徒指導、特別支援教育等、諸問題において心を痛めることも少なからずありました。しかし初めの3年間はコロナの影響もなく、歓迎会、退職校長会との懇親会、忘年会、新年会、送別会等と時節に応じた懇親会があり、耶麻地区の校長先生と和気あいあいと情報交換することができました。この情報交換が勉強になったり、次への活力に結び付いたりしたことが多々ありました。

また、仕事以外にも趣味のジョギングを介してのつながりを持つことができました。郡山シテイマラソン大会、奥川健康マラソン大会、蔵の町マラソン大会等、とあるチームに入れていただき、一緒に楽しむことができました。チームの中には各種大会で優勝をするなどとても速い人もおりましたが、私は決して速くは走れないのでゆっくり景色を楽しみながら走りました。チームで東京まで出向き、隅田川のほとりを走ったことや全国校長会が秋田市で開催された時、早起きして朝食の前に秋田市内を走ってきたこと等忘れられない思い出です。また、走った後の懇親会もそれは楽しい時間でした。

しかし、コロナで一変、練習で通っていたスポーツジムも、他県のスポーツジムで感染が報道されたことをきっかけにやめてしまいました。各種マラソン大会も中止が相次ぎ、1日3~5kmは走っていたのをすっかりやめてしまい、現在に至っています。機会があったら、また走るのを再開したいと思っています。

今年から、国立磐梯青少年交流の家で体験活動を提供する仕事をしています。全国でのイベントも復活し、本所のキャンセルも減り利用者も増えてきております。

ICT教育が重視される現在だからこそ、五感を働かせてのリアルな体験学習の必要性を実感しております。どうぞ耶麻地区からのご利用もお待ちしております。よろしく願いいたします。

### 「持ち味」と「支え合い」で

前喜多方市立塩川小学校長

会津坂下町立坂下南小学校長 湯田 眞佐利

勤務地は変わりましたが、片道約30分の道のりと飯豊連峰に向かって走るシチュエーションは変わりません。天気の良い日の運転は最高です。行動制限がなくなり地域の行事に触れる機会が出てきたことを嬉しく思う一方で、前任校でこうした機会がほぼ無かったことが残念ではない今日この頃です。

転勤のたび、子ども達はどこへ行っても変わらないなあと感じます。基本、素直で明るく元気です。そして、大人に元気を与えてくれる存在です。本校は、校長室の外が放課後児童クラブへの通り道になっており、通る際にはみんなにこにこ笑顔で、「さようなら。」とあいさつしてくれます。休み時間廊下を歩いていても「あっ！校長先生だ。」と言って駆け寄ってきて、色々な話をしてくれます。そんなとき、「元気を与えてくれてありがとう。やっぱどこのこめらもめんげえなあ。」と心から思います。

校長になりずっと大事にしている言葉があります。それは、「持ち味」と「支え合い」です。人は、それぞれ持ち味があり、その持ち味を発揮しつつ、足りない部分は補い支え合いながら生きています。「持ち味」は、強み、その人らしさと言い換えることができます。子ども同士、教職員同士、学校と地域が、この関係で繋がってれば、一人一人が生き生きと輝き成長できる、魅力ある学校になると考えます。学校は変わっても、この「持ち味」と「支え合い」で、めんげえこめらのため、先生方のため、地域のために力を尽くしていきたいと思っています。

最後になりますが、耶麻地区小校長会では、「持ち味」と「支え合い」で、素晴らしい力を持った先生方にいろいろと教えていただいたり、支えていただいたりしながら、楽しく充実した2年間を過ごさせていただきました。ほんとうにありがとうございました。コロナ禍にありましても、耶麻地区小学校長会の益々のご発展と先生方のご健康・ご多幸を心からお祈りしています。

## 学校経営あれこれ

## 校長室だより

喜多方市立豊川小学校 佐々木 豊

いわきでの教頭時代、大変お世話になった校長先生が「週刊 校長室通信」を出していました。面白く、また、ためになる内容で、毎週の発行を楽しみにしていました。A4版両面にびっしりと書かれた文章を読みながら、「毎週よくネタに困らないものだなあ」と感心（尊敬）していました。自分だったらすぐにネタ切れになってしまうのではと思えたからです。

そんな私も、ついに今年5月中旬から「校長室だより」を発行しています。発行の目的は次の2つです。

- ①職員室での話題提供（特に授業や指導方法等について）
- ②若手教員の育成（少しでもアドバイスになれば）

職員会議で、先生方に「授業について話題になるような職員室になってほしい」「若手教員の方はどんどん先輩に質問をしてほしい」「ベテラン教員の方は若手を育てる意識をもってほしい」というお願いをしたので、私も少しでもお役に立てればと考えたからです。もちろん、いわきでお世話になった校長先生へのあこがれも少なからずありました。

第1号には、「2、3号で終わらぬようがんばりたいと思います」と書きました。どれだけ発行できるか自信がなかったからです。月に2回は発行したいと思っていましたが、なんとか毎週の発行を継続して、9月末には16号になりました。

校長室だよりの話題は、そのときに私が感じたことや考えたことを書いています。「若手教員の育成」も目的の1つなので、ベテラン教員の方にとっては当たり前すぎる話題も書いています。発行を続けると、意外にネタ切れにならず、書きたいと思う話題が見つかるので不思議です。

いわきでお世話になった校長先生は年間46号も発行されています（しかも両面で）。内容も枚数もとうてい及びませんが、できる範囲でがんばりたいと思います。

## 市町村・地区だより

## 慶徳再確認・新発見

慶徳小学校長 佐瀬 俊英

先日、5・6年生の総合的な学習の時間の「地域の文化財巡り」で、私も一緒に文化財巡りを行いました。講師は、学校運営協議会委員でもある公民館の小澤館長様にお願ひしました。

慶徳地区は長床や稲荷神社の御田植祭など、歴史や伝統のある地区であることはご存じかと思いますが、その他にどんな文化財があるかご存じでしょうか？今回の文化財巡りで学んだことを紹介します。

スタートは学校です。ここには、1555年に慶徳城が建立されました。学校のすぐ近くには、今は用水路として使われていますが、その当時のお堀の跡が残っています。慶徳寺は1368年建立と歴史がありますが、那須にある殺生石とも関係があることが分かりました。御田植祭が行われる慶徳稲荷神社は、1091年源義家によって建立。1492年に御田植祭がスタートしました。新宮城は会津では黒川城の次に歴史が長く、約240年続きました。熊野神社と長床。長床はテレビ番組でも取り上げられるほど有名ですが、この地区の子どもたちにとっては、遊び場となっています。（5年児童より）柱の数は44本ですが、一カ所からでは重なりがあるため数えられない作りになっているそうです。宝物殿もあり、中には国の重要文化財もありました。その後、山崎横穴古墳群、古四王神社、千光寺、松野観音堂と3時間のコースでしたが、公民館長様のとてもしっかりとした説明で、子どもたちはこの地区の歴史や伝統を再確認・新発見することができました。でもこれはほんの一部。東北の歴史が塗り変わるかも知れないという、古墳時代の灰塚山古墳など、まだまだあるそうです。皆さんも慶徳の文化財巡りなどいかがですか？

これからも、学校と地域が一緒になって子どもたちに郷土愛を育み、「慶徳が好き」になるように、どんどんと地域に目を向けられるような機会を作っていけたらと思います。

## 市町村・地区だより

## 話の小窓

## 先人の思いを子どもたちに

喜多方市立駒形小学校長 齋藤 敦

## 創立150周年に向けて

熊倉小学校長 前田 敬

本校東側には雄国山がありその山麓には整備された田んぼが棚状に並び、農繁期にはその横の用水路を水が勢いよく流れています。特に大きな川がないのにこれだけの大量の水が流れているのには、先人の「水を引いて米がいつもたくさん獲れるようにしたい」という切実な思いが実現したものです。

駒形地区の雄国山麓には二つの堰が流れています。「狐堰」と「駒形堰」です。どちらも日橋川より水を引き込み、雄国山麓の田んぼを潤しています。「狐堰」は何と室町時代前半の応永2年(1395年)に地区の地頭によって開削が始められ、日橋側の一部を堰き止め、総延長8kmの水路を素掘りで完成させたそうです。「狐堰」と名付けられたのは、どう水を引けばよいかお稲荷様に占ったところ、一匹の白い狐が現れ東西の方角へ走り去り足跡を残し川の水を引く水路の場所を教えてくれたというところから名付けられているそうです。もう一つの「駒形堰」は、江戸時代の寛政7年(1795年)に地区民で開削されました。「狐堰」の直ぐ東上側、駒形山の西斜面をぬって流れた水が地区北部の田んぼを潤しています。開削工事は三度の失敗を経て、12月に始まり明るる年の3月に完成しています。「駒形堰」の現在の取水口は猪苗代第四発電所の揚水ダムの水を利用していますが、元々の取水口はここよりもずっと上流の堰になります。利用されていない古い駒形堰は、給水できなくなった際に即復旧させるため今も維持管理されているそうです。地区の人々が堰の大切さを実感し、大切にしていることがうかがえます。

毎年、4年生が地域を拓いた人々の学習として、二つの堰の見学学習を行っています。自分たちが生まれ育った地に、先人の願いが脈々と受け伝えられていること、自分たちの生活を少しでも豊かにしていこうと努めた人々の思いに気づかせる地域の宝とも言えます。

来年度、熊倉小学校は創立150周年を迎えます。創立は明治6年(1873年)6月5日、会津三十三観音7番札所「熊倉観音」で知られる光明寺に熊倉小学校が、会津念仏踊りで知られる安養寺に新合小学校が設置されたことに始まります。そして明治20年(1887年)に両校が合併するとともに、雄国に分校ができました。その後、校名の改称、校舎や体育館等の増築や新築、分校の閉校等を経て現在に至っています。

現在、本校では、創立150周年の記念事業を開催すべくPTA役員と教職員が中心となって準備を進めています。熊倉地区に住む多くの方々が学び、巣立っていった本校ですが、今も授業参観や奉仕作業等においてになる保護者の皆さんの熱心で大変協力的な姿勢を見ると、「おらが地域の学校」という想いを強く感じずにはいられません。そんな保護者や地域の方々の熱い思いに応えられる記念事業にしていければと思っています。そして、教職員だけでなく、子ども達や保護者、地域の方々みんなのアイデアと力を借りて、みんなの思い出に残るものにしていきたいと考えています。

過日、PTA役員と教職員に加え、学校運営協議会の委員の皆さんやバラ会(歴代PTA正副会長と歴代校長・教頭で構成された会)の代表の方々にも出席いただき、第1回の実行委員会を開催しました。そこでは、実行委員会の会則を承認していただいたり、記念事業の内容や予算、今後の取組の方向性についてご意見を頂戴したりしました。

今後は、各専門部会(記念事業部会、記念誌部会、記念式典部会、会計事務局会)を開催し、事業内容を決定したり、その実施計画や予算案を作成したりして、次年度の開催に備えていく予定です。子ども達や保護者、地域の皆さんのために、微力ながら精進して参りたいと思います。



## 話の小窓

## ありのままを見る

関柴小学校長 酒井 康雄

「トンボの飛んでいるところを見たことがありますか。」という質問に、大抵の人は「見たことありますよ。」と答えるでしょう。では、トンボは飛んでいるとき、脚をどのようにして飛んでいるのでしょうか。

幼少期から虫を捕り始めて50年以上経つにもかかわらず、飛んでいるトンボの前脚のたたみ方が分かったのがつい2年前。

ギンヤンマのホバリングの写真を撮影し、ふと前脚を見ると、以下の写真のようになっていたのです。



眼の後ろに隠れるように、うまく縦に折り曲げて収納されています。飛翔時の風の抵抗を少なくするための工夫ではないかと考えられます。デジタル機器の発達のおかげもありますが、前脚のたたみかたは自分にとっての大きな発見であり、衝撃でした。

普段よく見ているようで、実は一部分しか見えていないことは、トンボに限ったことではありません。以前、ある学級担任が自分の学級の子どものことを「よく見えています。」「よく分かっています。」と口にしていました。しかし、そこには一面だけ見て「見たつもり」「分かったつもり」になって安心してしまう姿がありました。

学校では、児童理解では子どもを丸ごと見取ったり、様々な危機管理においては様々な想定をしたりする場面があります。実態や事実を多面的に把握するためにも、日頃から事物・現象をありのままにとらえる目を養い、高める必要性を感じています。

## 編集後記

原稿をお寄せ頂いた校長先生方、お忙しい中、本当にありがとうございました。おかげさまで第132号を発行することができました。

世間では新型コロナウイルスの感染症が落ち着きを見せ始め、県民割や全国旅行支援事業がスタートし始めました。しかしながら、学校現場は、未だにコロナ陽性者や濃厚接触者対応が必要であり、全くもって気の抜けない状況を継続している・・・のが本当のところではないかと推察いたします。校長先生方も日々、様々な判断をし対応策を講じながらの学校生活を送られているところでしょう。そのような中ではありますが、こうして発行できた会報をご覧いただき、一時でも心が和む瞬間を共有できれば幸いです。

2月に、今年度最終号となる133号を発行する予定です。その際には、またお世話になりますので、ご協力の程よろしく願いいたします。

広報部長 裏磐梯小学校長 佐藤睦弘